ISSN 1881-3496

九州大学
大学文書館ニュース

第47号　2024.3.31

目　次

自校史に観る歴史の重要性と
大学の意義について……2
学徒出陣・大学紛争・コロナ禍……8
特別展示：「学徒出陣」から80年目を迎えて …11
九州大学大学文書館委員会名簿……12
九州大学大学文書館名簿……12
大学文書館日誌抄録……12

「昭和十八年入營學生記念樹」（2024年1月23日撮影）

かつて九州大学農学部正門があった場所の近くに、銀杏の樹と「昭和十八年入營學生記念樹」と刻まれた石碑が残されている。1943（昭和18）年10月、政府は学生・生徒の徴集猶予停止を閣議決定した。いわゆる「学徒出陣」であるが、本学では12月に法文学部生を中心に691名が出征し、その内60名を超える学生が戦死した。この石碑は、その際に建てられたもので、左側面に「九州帝國大學總長 荒川文六書」と彫られている。荒川文六（1878～1970）は、創立以来の工学部教授で、1936年11月から1945年２月まで第６代総長を務めた。

「学徒出陣」にあたり1943年10月19日には、「出陣学徒全学壮行会」が工学部運動場で開催された。壮行会を報じた新聞記事には、荒川総長の「しかもなほ我々後に残るものとしては諸君がその軍務を完全に果して、いつかは再び帰學して學究に就く日のあるやう、武運長久を祈るものである」という訓示の一部が掲載されている。総長名で建てられたこの石碑は、現存する本学の貴重な戦争関連遺跡であり、永久に保存されるべき記念碑と言える。

自校史に観る歴史の重要性と大学の意義について

池　谷　直　樹

はじめに

2022年10月から12月まで、九州大学で開講されている「九州大学の歴史Ⅰ」（大学文書館　赤司友徳准教授）を聴講する機会を得た。学部生時代から本学の学部・大学院教育を受け、その後も本学教員として10年以上勤務しているにもかかわらず、恥ずかしながら、本学の創立が西暦何年であるかも、自身が所属した工学部や所属部局創設の経緯がどのようなものであるかも全く知らなかった自分にとって、自校に対する愛着と現在の様々な環境に対する感謝の念を抱く大変刺激的な意義のある聴講であった。日々大学の管理業務や研究・教育業務に携わる中で、大学構成員だからこそ感じたいくつかの論点について、受講の記録と内容に対する意見として雑感を述べたい。

キャンパスの保存と歴史の重み

「九州大学の歴史Ⅰ」を聴講してから２ヶ月ほど経った2023年３月に、共同研究のため香港大学（The University of Hong Kong）に数週間滞在する機会を得た。超高層ビルに囲まれた都市部に位置する非常に味のあるコンパクトキャンパスに入ると、至る所に創立111年記念を祝う掲示がされていた。よく見れば、香港大学の創立は1911年で、2022年をもって創立111年、かつ、香港の中国返還25周年をまとめて祝うためだと記念ののぼりに書かれている。九州帝国大学創立は1911年であるから、偶然にも、同時期に創立した二つの大学に関係することになったと、自校史を知っていることの重要さをすぐに認識する機会となった。

香港大学の創立は公式資料によれば、1911年３月である。1910年３月に大学としての基盤が作られ、創立年月とされている1911年３月は、構成員による大学自治が認められた時期である。公式に大学が開始されたのは、人文科学（Arts）、工学（Engineering）、医学（Medicine）の三つの学部で、翌年の３月からという。一方の九州大学は、前身である九州帝国大学が創立した1911年１月を創立年と設定しているため、公式発表では九州大学の方が２ヶ月ほど先輩ということになる。しかしながら、実際の九州大学の創立の経緯を見れば、京都帝国大学福岡医科大学が九州帝国医科大学へ編入されたのが1911年３月である。要するに、当時総合大学としての機能を提供し始めた時期にはほぼ差がないと見ていいだろう。ちなみに、香港大学に学部として編入されたThe Hong Kong College of Medicineは1887年から単科大学としての機能を果たしており、九州大学医学部の前身である仮病院が1875年、県立福岡病院が1888年ということであるので、この点を比較しても両大学の創立時期は同等である（九州大学の場合、前身機関は病院の名前がつくものであるが、教育機関としての役割も担っていた。また、どこまで遡るかによるが、県立福岡病院の起源は福岡藩立医学校賛生館で、1867年まで遡ることができる）。すなわち、2022年現在で、111年の歴史を持つ二つの大学、という共通点を持っている。

しかしながら、香港大学のキャンパス内を散策していると、九州大学の現キャンパスでは感じたことのないような圧倒的な歴史の重さと長さを強く感じる。キャンパスのMain Building（図１）は現在も現役で使われているが、竣工は1912年で、ほぼ創立当時から存在する。ほかにも全部で13棟の歴史的建造物が香港大学と香港そのものの発展を象徴する史料として、大学と官公庁（Antiquities and Monuments Office（AMO）、および Commissioner for Heritage's Office）の協力のもと保存されている。また、これらの歴史的建造物はHKU Heritage Sights and Sitesとして一般公開されており、パンフレット、音声案内、Visitor Center（図１）なども整備され、だれでも香港大学の歴史を直に知ることができるようになっている。こうした歴史的建造物を残しつつ、大学機能の拡大に合わせて徐々にキャンパスは広がってはいるものの、香港島に位置する香港大学は土地の制約から非常にコンパクトなキャンパスとしてまとめられており、わずか１日でキャンパス内を十分に見学することができる。キャンパス周辺の住民だけではなく、中国各地から入学してくる若い世代の学生にとっても、所属する大学が経てきた歴史を否応なしに感じ取ることができ、人としての歴史観や価値観の醸成を含めて人を育てるとい

う大学の機能をキャンパスとして担っているように感じた。

一方の九州大学は、2005年に開始された移転が2018年に完了し、国内では単一キャンパスとして最大規模の272ha（東西３km、南北2.5km）として、新しいスタートによって今後の発展を目指すことになった。移転事業が開始された前後で工学部に所属していた著者は、六本松キャンパス（基幹教育）、箱崎キャンパス（移転前の専攻教育）、伊都キャンパス（移転後の専攻教育。伊都地区で工学部教育が始まった最初の2006年である）、さらには筑紫キャンパス（卒業研究とその後の大学院）のいずれのキャンパスでも過ごした稀有な経験を持つが、当時を思い返すと、新設された伊都キャンパスに移動するという期待感が強く、箱崎キャンパスを通じて自身の歴史的価値観を涵養する間もなかったように思われる。旧箱崎キャンパスの近代建築物の一部（正門、門衛所、本部第一・第三庁舎、工学部本館）は保存されることが決定しているが、多感な学生時分をそうしたキャンパスで過ごせることと、史料として近代建築物を保存するということでは、果たせる効能に大きな違いがあると感じてしまう。施設も含めてとにかく全てがコンパクトである香港大学に対して、広々としたキャンパスで十分な実験・研究装置を持って勉学・研究に打ち込めることや、今後の大学の発展や国際化にも臨機応変に対応できるという点などにおいて、キャンパス移転によって大学構成員は多大なメリットを享受しているわけであるが、香港大学訪問の経験は、九州大学が失ってしまったかもしれない蓄積された歴史的価値を感じさせる機会となってしまった。

世界ランキングとしての二つの大学の位置

物理的なキャンパスの歴史の差異はあるものの、大学機能という点においてはどちらも111年（2022年現在）の歴史があり、社会に対して果たしてきた貢献は大きなものであろう。大学機能をどのように客観視するかは難しい問題であると思うが、頻繁に引き合いに出されるのはQS世界大学ランキング（Quacquarelli Symonds、以下、QSランキング）やTHE世界大学ランキング（Times Higher Education、以下、THEランキング）などの外的インデックスであろう（ここでは、これらのインデックスによる客観評価の問題点については論じない）。教育と研究という大学のソフト面の発展は一朝一夕には進まないものであり、また、100年以上の長い歴史のある九州大学構成員として、偶然にも同じ長さの歴史を持つ香港大学に滞在したことを契機として、旧帝国大学、東京工業大学と近隣のアジア諸国の国内最上位校について、創立年と世界大学ランキングの関係を調査することで、大学の持つ歴史について再考したい。

表１には、旧帝国大学の枠組みで比較される７大学とランキング上位に位置する東京工業大学の８大学を創立年別に並べ、2023年に公表されたQSランキングとTHEランキングを併載した。加えて、比較対象として香港大学、清華大学、ソウル大学、国立台湾大学、シンガポール国立大学のアジア圏の上位校を並べた。九州大学は、国内の旧帝国大学では４番目に創立された大学であり、奇しくも、香港大学に加えて清華大学とも創立年を同じくする（各大学の厳密な創立年については、検討を要する。ここでは、各機関のWebページに記載の内容を参考にした。詳細は、表１の注釈を

図１　左：現在でも使用されているMain Building。竣工は1912年であるが、現在でも内部に講義室とゼミ室が完備されている。右：Visitor Centre。Visitor Centre自体も歴史的建築物に登録されているWorkmen's Quarters（労働者宿舎）で、1918年から1919年に竣工されたとされている。

表１：旧帝国大学、東京工業大学、近隣アジア諸国の国内最上位校の創立年と世界ランキング。

大学名	創立	QS（2023）	THE（2023）	備考
東京大学	1877年	23	39	
京都大学	1897年	36	68	
東北大学	1907年	79	201-250	
九州大学	1911年	135	501-600	
北海道大学	1918年	141	501-600	*1
東京工業大学	1929年	55	301-350	*2
大阪大学	1931年	68	251-300	
名古屋大学	1939年	112	301-350	
香港大学	1911年	21	31	
清華大学	1911年	14	16	*3
国立台湾大学	1928年	77	187	*4
ソウル大学	1946年	29	56	*5
シンガポール国立大学	1980年	11	19	*6

*1 前身の札幌農学校は、東北帝国大学に編入された後、1918年に北海道帝国大学として独立した。
*2 東京工業大学のWebページでは前身の東京職工学校の創立年1881年を大学創立年としているが、ここでは、帝国大学令（1886年）では総合大学を大学と定義し、単科大学を大学に含むとされたのが1919年であることを考慮し、東京工業大学と名称変更された年を示している。
*3 Tsing Hua Imperial Collegeの創立年。現在の名称であるNational Tsing Hua Universityの創立は1928年。
*4 ソウル国立大学は京城帝国大学が閉学後に施設を転用して創立した。
*5 大日本帝国時代の台北帝国大学（たいほくていこくだいがく）の創立年1928年を起源としている。
*6 1959年にシンガポール自治の獲得。1959年にはUniversity of Malaya in Kuala LumpurとUniversity of Malaya in Singapore (UMS)として大学自治を獲得。UMSがThe University of Singaporeとなったのが1962年とされているが、現在のNational University of Singapore (NUS)としての創立年は1980年とWebページに記載がある。

参照されたい）。創立年に全く無関係に、九州大学のQSランキングは、残念ながらアジア圏のトップ校には遠く及ばず、国内を見ても後発の旧帝国大学である大阪や名古屋にも追い抜かれている現状である。加えて、大日本帝国時代に台北帝国大学として設立した現在の国立台湾大学や、ソウル大学（ルーツはないとされているものの京城帝国大学として基盤形成には影響を及ぼしたと著者は考える）にも遠く及ばない。さらに、ほかのアジア圏内に目を向ければ、創立年が九州大学と同じ清華大学も14位と世界トップ校に伍しているし、シンガポール国立大学に至っては創立年が極めて新しい（シンガポールの独立がそもそも1965年）にもかかわらず、堂々のアジア圏でのトップ校である11位の座を2019年から継続して獲得している。

一見この無相関に見える創立年と世界ランキングはどのように解釈できるだろうか。それは、総合大学としての高度な研究教育機関を構築するには確かにそれなりの年月が必要であるものの、高等教育機関として一旦成熟したシステムが形成されてしまえば、大学の歴史的蓄積よりも、社会情勢、国と使用言語、国内での順位や評判、さらには立地など、多様な別の要因が重なり、優秀な学生や研究者、さらには教員までもが吸引され、現在の外的インデックスにより評価される世界上位校が形成されていくことの証左である、ということではないだろうか（現状でこの点については著者の意見に過ぎず、アジア圏のトップ校だけではなく、QSランキング上位校と各大学の創設年の相関関係を統計的に評価する必要がある）。また、当然ランキングが本当に各大学の研究・教育力を反映しているのかというランキング自体の批判もあろう。そもそもQSランキングが発表されたのは2010年が最初であり、その前身のTHEランキングも2004年が最初の発表年である。意外にも、21世紀に入るまでは大学評価の外的インデックスはなかったことになる。それに加えて、中国を中心とするアジア圏内の大学の台頭を見ると、こうした外的インデックスによるランキングが発表されるようになると、その指標を向上させるための対策が練られるようになることに加え、ランキングをもとに優秀な人材（学生と教員）が吸引され、さらにインデックスの上昇を助長する効果もあるのだろう。すなわち、世界の大学が単一の

指標で評価されることが、各国の大学を同質化させる方向へ進ませ、本来各大学が持つ校風や歴史という外形的には計測できない重要な価値が埋没してしまうのではないかと思われる。その意味では、このような外的インデックスで各大学を比較すること自体が必ずしも正義ではないと認識しつつも、100年を超える歴史を持ち、国内で４番目に創立した帝国大学である本学が、その長い歴史に見合う外的評価を得られるように発展してほしいと思う。一方で、この外的インデックスによる評価と歴史の無相関関係を前向きに捉えれば、歴史的キャンパスから広大な新設キャンパスに切り替えた新しい九州大学にも、今後国内外の世界トップ大学と伍していく可能性が残されているのかもしれない。

国際化の流れと九州大学が設定する Key Performance Indicator (KPI)

日本を除くアジア圏内の大学のランキング上の台頭は傾向と対策の結果であろうと推測するところであるが、日本政府においても、ランキング上昇を目論んだ方針が採られているように思われる。例えば、日本学術振興会科学研究費の研究種目では、ここ数年の間に国際共同研究支援に関係する研究種目（国際先導研究、国際共同研究強化、国際活動支援班、海外連携研究、帰国発展研究）が充実化されている（図２）。著者が九州大学に助教として着任した2011年には、こうした国際連携に関連した研究費は少なくとも科研費の枠組みの中には設定されておらず、むしろ若手研究者向けの大型の研究種目が充実していた（図３中段、若手研究の枠）。当時若手研究者向けには、若手研究B（現在の若手研究と同じ規模）に加えて、3000万円以下の若手研究A、一億円以下の若手研究Sが設定されていたが、これらの大型種目は科研費の若手研究の枠からは無くなってしまった（現在の若手研究者支援は、博士大学院生へのサポートも含めて、別の形に変わっていると思われ、国全体の方針として若手支援がなくなったという主張ではない）。こうした若手研究支援から国際連携研究支援への切り替えは、表向きには、国際共同研究を主導する日本人研究者を増やし、延いては国際アカデミアでの日本の存在価値を上昇させるという至上命題に向け、日本の研究者を取り巻く環境の変化を表すものであると思われる。

こうした国際化の傾向と外的インデックスによる評価は、当然本学のKPIの設定にも影響を及ぼしている。本学教員には、KPIツリーとして、教育・研究・社会連携などの項目ごとに、目標達成のための取り組みと成果指標KPIが提示されており、構成員である教員はこれに向けて教育・研究業績の向上を目指している。なかでも、教育・研究の枠においては、いずれも留学生と外国人教員の目標値や、国際共著論文数を目標として設定し、QSランキングの評価項目を色濃く反映したKPIの設定がされていることを明記している。

日本のアカデミアや本学の国際化には全く反対ではなく、むしろ海外連携に関する研究費が拡充されることには、一研究者として大変ありがたいと思っており、またその恩恵を多大に受けている。また、大学ランキングの高い大学が良い大学かどうかは別として、他国の大学にアクセスすることの物理的な制約がほとんどなくなっている現在においては、積極的な学生にとっては無数にある世界中の大学が進学先候補となる。そうした状況において、留学先を考える学生や留学生を受け入れる教員の双方にとって、ランキングは極めてわかりやすい指標となっており、それを見据えた運営方針の設定はしかたがない大局的な流れであると思う。さらに、日本人学生人口が減少する中で、いかに優秀な学生を獲得するかは大学にとって死活問題であり、その意味でQSランキングを

国際共同研究加速基金		
国際先導研究	我が国の優秀な研究者が率いる研究グループが、国際的なネットワークの中で中核的な役割を担うことにより、国際的に高い学術的価値のある研究成果の創出を目指す。ポストドクターや大学院生の参画により、将来、国際的な研究コミュニティの中核を担う研究者の育成にも資する。 （７年（１０年までの延長可）　5億円以下）	基金
国際共同研究強化	科研費に採択された研究者が半年から１年程度海外の大学や研究機関で行う国際共同研究。基課題の研究計画を格段に発展させるとともに、国際的に活躍できる、独立した研究者の養成にも資することを目指す（1,200万円以下）【令和５(2023)年度公募以降改称】	
海外連携研究	複数の日本側研究者と海外の研究機関に所属する研究者との国際共同研究。学術研究の発展とともに、国際共同研究の基盤の構築や更なる強化、国際的に活躍できる研究者の養成も目指す（３～６年間　2,000万円以下） 【令和５(2023)年度公募以降改称】	
国際活動支援班	新学術領域研究における国際活動への支援（領域の設定期間　単年度当たり1,500万円以下） 【平成30(2018)年度公募以降、新学術領域研究の総括班に組み込んで公募（平成31(2019)年度公募まで）】	
帰国発展研究	海外の日本人研究者の帰国後に予定される研究（３年以内　5,000万円以下）	

図２：日本学術振興会科学研究費の研究種目のうち、現在設定されている海外との連携に関係する研究種目。2023年度科学研究費助成事業「科研費」募集要領より抜粋。

研究種目等	研究種目の目的・内容
科学研究費	
特別推進研究	国際的に高い評価を得ている研究であって、格段に優れた研究成果をもたらす可能性のある研究 （期間３～５年、１課題５億円程度を応募総額の上限の目安とするが、上限、下限とも制限は設けない）
特定領域研究	我が国の学術研究分野の水準向上・強化につながる研究領域、地球規模での取組が必要な研究領域、社会的要請の特に強い研究領域を特定して機動的かつ効果的に研究の推進を図る （期間３～６年、単年度当たりの目安１領域　２千万円～６億円程度）
新学術領域研究	（研究領域提案型） 研究者又は研究者グループにより提案された、我が国の学術水準の向上・強化につながる新たな研究領域について、共同研究や研究人材の育成等の取り組みを通じて発展させる （期間５年、単年度当たりの目安1領域　１千万円～３億円程度） （研究課題提案型） 確実な研究成果が見込めるとは限らないものの、当該研究課題が進展することにより、学術研究のブレークスルーをもたらす可能性のある、革新的・挑戦的な研究（期間３年、単年度当たり１千万円程度）
基盤研究	（Ｓ）１人又は比較的少人数の研究者が行う独創的・先駆的な研究 （期間 原則５年、１課題 5,000万円以上２億円程度まで） （Ａ）（Ｂ）（Ｃ）１人又は複数の研究者が共同して行う独創的・先駆的な研究 （期間３～５年） （応募総額によりＡ・Ｂ・Ｃに区分） (A)　2,000万円以上 5,000万円以下 (B)　500万円以上 2,000万円以下 (C)　500万円以下
挑戦的萌芽研究	独創的な発想に基づく、挑戦的で高い目標設定を掲げた芽生え期の研究（期間１～３年、１課題　500万円以下）
若手研究	（Ｓ）４２歳以下の研究者が１人で行う研究（期間５年、１課題　概ね3,000万円以上１億円程度まで） （Ａ）（Ｂ）３９歳以下の研究者が１人で行う研究 （期間２～４年、応募総額によりＡ・Ｂに区分） (A) 500万円以上3,000万円以下 (B)　500万円以下
研究活動スタート支援	研究機関に採用されたばかりの研究者や育児休業等から復帰する研究者等が１人で行う研究 （期間２年以内、単年度当たり150万円以下）
奨励研究	教育・研究機関の職員、企業の職員又はこれら以外の者で科学研究を行っている者が１人で行う研究
特別研究促進費	緊急かつ重要な研究課題の助成
研究成果公開促進費	
研究成果公開発表	学会等による学術的価値が高い研究成果の社会への公開や国際発信の助成
学術定期刊行物	学会又は複数の学会の協力体制による団体等が、学術の国際交流に資するために定期的に刊行する学術誌の助成
学術図書	個人又は研究者グループ等が、学術研究の成果を公開するために刊行する学術図書の助成
データベース	個人又は研究者グループ等が作成するデータベースで、公開利用を目的とするものの助成
特別研究員奨励費	日本学術振興会の特別研究員（外国人特別研究員を含む）が行う研究の助成　（期間３年以内）
学術創成研究費	科学研究費補助金等による研究のうち特に優れた研究分野に着目し、当該分野の研究を推進する上で特に重要な研究課題を選定し、創造性豊かな学術研究の一層の推進を図る　（推薦制　期間５年）

図３：2012年度科学研究費助成事業「科研費」の募集要領で設定されているすべての研究種目。

踏まえてKPIを設定することも納得できる。しかしながら、大学という自由に学問と研究を遂行できる環境において、分野別QSのランキングを上げるためにKPIを設定していると明記するほどに外的評価の向上に躍起になる現在の大学を取り巻く状況には、現在の大学教員は学問と研究の本質を失いかねない環境に常時晒されていると個人的には強く感じてしまう。

大学創立当時の価値観

以上を踏まえて、最後に、日本の帝国大学創立当時の大学論について考察したい。講義で取り上げられた大学論には大きく次の二点があった。第一に、大学創立当時の教育機関として、大学はどうあるべきかという点、第二に、教育研究機関として大学自治をどのように捉えるかという点である。後者については、国家のために組織された研究教育機関である大学が、学問の自由の権利を背景に自由な研究と学問を獲得するまでの経緯が詳しく論じられており、大学構成員として現在当然のように享受している権利が如何に作られてきたかや、大学教授会がなぜ教員により構成されているかなど、大変興味深い論点を含んでおり、聴講に際して著者が二番目に興味を持った点であった。しかしながら、ここでは、大学に籍を置く教員として、今後の大学組織の在り方を再考する意味でも、前者の点について整理したい。

先に述べた表１に示す通り、日本で長い歴史を持つ旧帝国大学でも、創立してたかだか1.5世紀ほどしか経たない。世界に目を向ければ、最古の大学であるイタリアのボローニャ大学は1088年創立（創立934年）とされているし、ケンブリッジ大学は創立800年以上、ハーバード大学も380年以上、産業革命以降に誕生したマサチューセッツ工科大学でさえも、創立160年を超えている。つまり、日本で高等教育機関が誕生した時には、世界にはすでに日本の大学とは比べ物にならないほどに長い歴史を持った大学が存在していたことになる。

こうした状況の中で、19世紀後半に日本に高等教育機関の設置の要請を受けた設立当時の大学人

による大学論が極めて本質的で的を射た言明がされていて大変興味深いことに加えて、現在の大学教員として大学の存在意義を再考させるものであると思う。当時の大学論では、ドイツ型の自治・自修・自制の精神を育成する教育機関を真正なる大学として、そのカウンターパートである真ならざる大学は、フランス型の講義中心と試験至上主義的な育成プログラム重視の教育機関であると論評されている。こうした大学論は、高根義人が大学の目的を「ただ学芸を教授するのではなく、学問の研究発達」と言明していることや、外山正一による「大学は単なる人材養成の機関ではなく研究機関であり、大学は総合制をとるべきである」という論調、さらには、加藤弘之による「世界に仙境でない大学はない」という主張からも、当時新設される高等教育機関に求められる標準的な大学像であったのだろうと想像される。現在は、最初の帝国大学である東京大学が創立してから150年近くが経つわけであるが、当時の大学論は現在の指定国立大学法人制度や国際卓越研究大学制度により、特定の指定校に公的資金を投入して、大学に研究を主導できる機能を残そうとする方策と何ら変わらないように思われる。また、当時の大学の在り方として総合制を強調している点についても、現在でも頻繁に謳われる学際・国際・綜合を重視する考え方に通じている。一方で、“仙境でない大学はない”や“学問の研究発達”など、大学が研究を中心とした教育機関であることが強調されているが、現代社会においては、大学の主たる業務は教育であると認識されているように思われる。加えて、著者が関わる工学分野においては、特に応用研究が先行する風潮にあるように思われるが、大学は“仙境”として即座には無益な研究課題にも取り組める研究教育組織たるべき、という示唆に富んだ当時の大学論であるようにも思われる。

こうした大学論をすでに長い歴史を持っていた欧米の大学論を適切に輸入し、大学という高等教育システムの機能を創出したことや、それを基盤として日本全国、さらには、台北や京城にまで帝国大学を展開していったことなど、当時の大学基盤の形成は現在の社会にも大きな影響を与えているといえよう。また、大学創立当時のこうした経緯を知ると、当時の大学人の綜合力と俯瞰力、そして行動力の高さを垣間見ることができる。さらに、現代のような外的インデックスによる単一指標によって大学組織を評価することがない当時においても、今に通ずる大学組織の根幹を創り上げてきたという点にも大変驚かされる。以上のことは、当時の大学人や大学創立に関わった大学構成員が如何に優れたエリート層であったかを示しているように思う。現代における外的インデックスを重視したKPIの設定は、アカデミアにおける国境が不明瞭になった現在において避けられない国際的な流れであり、学生や研究者の獲得を念頭に数年から十数年で順位が変わっていくようなランキングを考慮しなければならないことも真実であろう。その一方で、世界のグローバル化とネットワーク構築がこれだけ進んだ現代においても、日本の大学創立時の大学論に垣間見られる当時の大学人の考え方が、現在の大学構成員にも根底には残っていると思いたい。その意味でも、研究を主導し教壇に立つ教員は、自校史並びに日本の大学組織が作られた経緯を十分に理解しておく必要があろうと感じた。

さいごに

本講義の拝聴により、大学の歴史のみならず、大学構成員として知っておくべき日本の大学機関の創出の経緯を知ることができた。それと同時に、おそらく学生時に受講するのとは全く違った価値観で、様々に考えさせられることが数多くあった。「九州大学の歴史」を受講する学生の中には、比率としてはわずかかもしれないが、大学教員や研究者を目指す学生も含まれているであろう。また、民間企業においても、将来の日本社会を支える構成員となる有望な学生も参加しているであろう。こうした学生には、自校史を知ることで、九州大学や日本の大学組織を創り上げた先人の大学人に対する誇りを持ってほしい。本講義は、真にそうした機会を与えるものであり、九州大学を進学先として選択した学生には、ぜひ聴講してほしい充実した講義であることを最後に付したい。

文献/資料

ソウル大学; https://en.snu.ac.kr/about/history/timeline

東京工業大学; https://www.titech.ac.jp/public-relations/about/overview/history

大阪大学; https://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/ou-history

名古屋大学; https://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/history-data/history/

北海道大学; https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/hu150_chronology_1918.html
Tsinghua University; https://www.tsinghua.edu.cn/en/About/General_Information.htm
National University of Singapore; https://eresources.nlb.gov.sg/infopedia/articles/SIP_50_2005-01-17.html
香港大学; https://www.hku.hk/about/university-history/the-early-years.html
九州大学100年史; https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/publications_kyushu/qu100th
近代建築物取り扱いについて（九州大学）; https://www.kyushu-u.ac.jp/f/30138/toriatsukai.pdf
QR World University Ranking; https://www.topuniversities.com/university-rankings
THE World University Ranking; https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings

（九州大学大学院 総合理工学研究院教授）

学徒出陣・大学紛争・コロナ禍

藤　岡　健太郎

３年あまり続いたコロナ禍はようやく終息したようで、この原稿を書いている段階では、マスクを着用している人の方が少数派になっているように見える。

新型コロナウィルス感染症が流行し始めた2020年は、卒業式も入学式も中止となり、授業もオンラインで行われたため、大学から学生の姿が消えることとなった。長期にわたって大学構内で授業が行われなかったのは、日本の大学の歴史の中では第二次世界大戦末期と大学紛争に次いで３度目のことであろう。

筆者は九州大学の基幹教育総合科目で「大学とは何か」「九州大学の歴史」を担当している。「大学とは何か」ではその１回分として、「大学生とはなにか―学徒出陣と大学紛争から考えてみる―」という題目での講義を（毎年度ではないが）行ってきた。その趣旨は、大学生がその本分である「学ぶ」ということを大学で行うことができなくなったときに、そのことをどのように考えていたのか、というところから、大学生とは何をどのように学べばよいのか、学生たちに考えさせる、というものである。また「九州大学の歴史」では学徒動員・学徒出陣と大学紛争について、それぞれ概説を行ってきた。

本稿では、これらの授業の内容を簡単に紹介するとともに、それらに対して学生たちがどのように反応したかについて見ていきたい。さらにそこから、コロナ禍における大学と学生たちについても若干の言及を行うこととする。

１．学徒出陣

2023年は1943年の学徒出陣から80周年であった。出陣学徒の多くが戦死し、生き残った学徒は存命でも100歳に達しており、ほとんどの方は鬼籍に入ってしまっているだろう。彼らの経験を直接聞くことはまもなく不可能となる。

「大学とは何かⅠ」の授業では、学徒出陣について、それ以前は大学生は徴兵猶予が与えられていたこと、教育勅語の「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」からすれば出陣は当然のことであると見なされたこと、 出陣したのは主として文系学生であったが理系学生も学徒動員などで授業は受けられなかったことなどを示した。その上で、出陣に意味を見出そうする学生と、無意味だと考える学生の日記を紹介した。

まず、出陣に意義を見出そうとする学生の代表としては、安達卓也（東大法学部、神風特別攻撃隊として戦死）の1943年10月12日入隊直前の日記を取り上げた。

> 強烈な現実の嵐の前に「死」に直面し、その中に新らしく生きて来る我々の学の精神こそ、我々の内にひそめる真の学的精神であらねばならない。我々は学を戦に代へた。それは学の飽くなき追求であり新らしき生命の獲得なのである。一人たりとも学徒が生を得て帰還したら、その内から真の東西の理想が生れ、雄大な生成発展の構想が構成され、真に東亜の人々を新らしき道義の世界に導き得るであらう。
>
> 勿論、我々は消耗品に過ぎない。波の如く寄せ来る敵の物質の前に、単なる防波堤の一

塊の石となるのだ。然しそれは大きな世界を内に築くための重要なる礎石だ。

我々は喜んで死なう。新らしい世界を導くために第一に死に赴くものは、インテリゲンツィアの誇りであらねばならない。

（白鴎遺族会編『雲ながるる果てに―戦歿飛行予備学生の手記―』、日本出版共同株式会社、1952年、166～167頁）

次に、出陣は無意味とする学生の代表は、松岡欣平（東大経済学部、1945年戦死）の1943年９月27日の日記である。

まだまだ学問の世界は広い。世界的な研究をしてもわからぬ所は無限だ。げに学問は永遠である。 永遠の真理を究めんと斧をかざす吾々、本当にやり甲斐のある男子の本懐これにすぎるものなからん。永遠の真理の前には戦争など一場の喜劇に終るであらう。絶対の真理に直面しては軍備拡張は蜘蛛の巣を作るにも足りないものかもしれない。しかし人間は弱いものだ。この些細な現象のために、永遠の研究を捨てなければならないのだ。

（日本戦没学生記念会編『新版　きけ　わだつみのこえ―日本戦没学生の手記―』、岩波書店、1995年、213頁）

この両者の文章に対し、 筆者なりの解釈を示した上で、 どちらにより共感するか、 九大のE-learning SystemであるMoodleの「クリッカー」機能を利用して学生に尋ねてみたところ、2020年度は松岡により共感する者が87％、安達により共感する者が９％であったのに対し、2021年度は前者が64％、後者が29％となった（残りは「どちらにも共感しない」）。 共に松岡への共感の方が多かったのは予想どおりであったが、21年度に安達への共感が急増したのは気になるところである。

2023年度の「九州大学の歴史Ⅰ」では授業の最終回で学徒動員・学徒出陣を取り上げた。同じ回では前半で理学部の創設について取り上げたので、学徒動員・学徒出陣については１回の半分ほどの時間で、学徒動員の開始から通年動員・授業停止に至る過程、軍事教練の開始から学徒出陣までをそれぞれ概説する程度の内容にせざるを得ない。同年度は都合のよいことに、授業翌日から附属図書館と大学文書館等との共催で「特別展示：「学徒出陣」から80年目を迎えて」が始まることになっていたので、毎回課していた小レポートの課題を同展示の感想とし、授業で十分に取り上げることができなかったところを補うこととした。

感想文は100名近い学生から提出された。授業では取り上げることができなかった、実際に出陣した学生の声が展示では紹介されており、自分たちと同世代の学生たちが学問を擲って出陣せねばならなかったことに衝撃を受けたという感想も多く見られ、 大学で学ぶことへの意欲が増したという学生も多かった。「平和な時代に生まれてよかった」という類いの感想も少なくなかったことは残念ではあるが、少数ながら、自由に学ぶことのできる平和な状態を守る努力をしないといけないと感じた学生もいたことで、この展示は意義あるものとなったと言えよう。

２．大学紛争

大学紛争は学徒出陣の四半世紀後、1968～69年に起こったものである。出陣学徒の子供の世代ぐらいにあたる学生たちによる「叛乱」であった。それから55年、いまの大学生からすると祖父母の世代ぐらいの学生によるものである。

「大学とは何かⅠ」の授業では、学徒出陣と同じ回で大学紛争を取り上げた。内容はマスプロ教育等、60年代の大学全般をめぐる問題について説明した上で、 東大・ 日大紛争を主として取り上げ、九大紛争についても簡単に触れた。東大紛争については山本義隆の『知性の叛乱　東大解体まで』 などを示して、「自己否定」 や「大学解体」という学生たちの考え方についても、 概要のみだが説明した。その上で、学徒出陣と同様に「クリッカー」 を用いて、「あなたが大学紛争のさなかに九大生であったと仮定して、「自己否定」 や「大学解体」の考え方に共感していたと思いますか？　また、共感しただろうと考えた場合、バリケード封鎖等に参加していたと思いますか？」と問い、以下の４つの選択肢から選ばせた。

1　共感して、封鎖等に参加していたと思う
2　共感はするが、封鎖等には参加しなかったと思う
3　共感しないし、封鎖等にも参加しなかったと思う
4　共感しないし、封鎖等を破ろうとしたと思う

その結果は以下のとおりである。

	2020年度	2021年度
1	10％	16％
2	51％	46％
3	36％	38％
4	3％	0％

およそ６割が共感を示す一方で、４割近くが共感しないとしている。現代の学生気質からしてこの割合が高いと見るか低いと見るかは考え方次第だと思うが、８割以上の学生が封鎖に参加しないと答えたのは予想どおりと言えるだろう。

また、「九州大学の歴史Ⅱ」の授業でも、１回分の半分の時間で九州大学における大学紛争を取り上げた。マスプロ教育等、60年代の大学全般をめぐる問題について簡単に説明した上で、エンタープライズ寄港問題から米軍機墜落事件とその引き下ろし問題、建物封鎖から封鎖解除までを、事実関係に絞って概説した。この回の小レポートでは、「もしあなたが1968～69年の大学紛争のときに九州大学の学生であったら、どのように行動していたと思いますか。していたと思う行動（デモに参加した、バリケード封鎖に参加した、家で寝ていた、など）の内容と、そのように行動していたと思う理由を簡潔に説明しなさい。」という課題を課している。「大学とは何かⅠ」とは異なり自由回答であるため回答内容を割合で示すことはできず、年度によって若干傾向も異なるが、概ね、「デモには参加するがバリケード封鎖には参加しない」「関与せず自分のしたいことをする」という回答が多い。少数ながら「バリケード封鎖に参加していたと思う」という勇ましい（？）学生もいるが、心情的には封鎖学生に共感するが、実力行使という暴力、あるいは法に触れる行為には反対、就職できなくなると困る、と答えた学生も多い。また、そのように考える学生が増えつつあるように感じられる。授業では紛争の結果まで話しているため、「負け戦はしたくない」という学生も多いのかもしれない。デモに参加するという学生の中には「周りに流されやすい性格だから」という理由を示した学生も少なくない。紛争当時もそのような学生は少なからずいただろう。なお、これまで１人だけ「偉い人の言うこと、決めたことには従うべきだ」という趣旨で封鎖学生を非難する回答をした学生がいたが、こういう学生が今後増えないか心配しているところである。

３．コロナ禍

日本では2020年に始まったコロナ禍では、同年度当初は学校は閉鎖され授業自体が行われず、九大の場合は５月からようやくオンラインでの授業が開始された。他大学も同様の状況がしばらく続いた。対面での授業が行われないことに対し、授業料返還の訴訟が起きた例もあったように、オンライン授業に対しては多くの学生から不満の声が上がり、教員側も慣れない授業形態に四苦八苦することとなった。特に実験・実習などはオンラインで行えるはずもなく、必要な教育を十分に受けられないまま卒業することとなった学生も少なくなかったことであろう。一方で、対人接触に関する障害のある学生や、通学距離の長い学生、就職活動中の学生からは、むしろオンライン授業の方が歓迎される、ということもあった。

コロナ禍のもとでは2020年度の初めの１か月程度を除いて、正常な状態ではなくとも授業が行われたのであるから、学徒出陣や大学紛争とは異なるとも言えよう。学徒出陣とは学外から強いられて不正常な状態になったという点では共通しているが、大学紛争は学生がみずから不正常な状態にすることを選択したという点では異なっている。学徒出陣では具体的な行動でそれに反対した学生はおそらく皆無だった（徴兵検査の結果が悪くなるように工作した場合はあったようだ）が、大学紛争は多くの学生が直接行動で体制への異議申し立てを行い、コロナ禍では少数ながらオンライン授業への異議申し立てを行った学生がいたという点では大学紛争と共通していると言えるだろう。

学徒出陣にしても大学紛争にしても、本来できたはずの大学での学びができなくなり、その後の人生を狂わされてしまった人達も少なくなかったであろう。 学徒出陣では多くの学生が命を落とし、未来を閉ざされることにもなった。このたびのコロナ禍はこの２つほどの影響はなかったかもしれないが、すでに「コロナ世代」という呼び方をされるようになっており、コミュニケーション力が弱いとも言われている。

学徒出陣にしても大学紛争にしても、学生個々人のみならずその後の大学や社会のあり方に大きな影響を与えることとなった。負の影響も小さくない。コロナ禍も、今後の大学や社会、学生個々人に長期的に大きな影響を与えることになるかもしれない。誰にとっても負の影響よりも正の影響の方が大きくなることを願うばかりである。

（九州大学大学文書館副館長 教授）

特別展示：「学徒出陣」から80年目を迎えて

【会　期】令和５（2023）年12月２日（土）～ 24日（日）
【時　間】平日 9:00－21:00　　土日祝 10:00－18:00
【場　所】九州大学伊都キャンパス　中央図書館３階　エントランス
【主　催】九州大学附属図書館
【共　催】九州大学大学文書館、九州大学文学部同窓会

2023（令和５）年９月30日、「学徒出陣」から80年目を迎えるにあたって、九州大学文学部同窓会が総会会場（箱崎サテライト内 旧工学部本館３階第１会議室）で、「「学徒出陣」から80年目を迎えて」という小展示を行うことになり、大学文書館がパネル作成と設置を行った。その後、より多くの方々にということで、伊都キャンパスにある中央図書館を会場として、九州大学附属図書館、九州大学大学文書館、九州大学文学部同窓会が共催で、規模を拡大した特別展示を行うことになった。時期は、奇しくも80年前に多くの出陣学徒が入営・入団した12月であった。

展示資料として文書館の収蔵資料から厳選し、パネル・キャプションの作成、構成配置等を行った。一部資料は九州大学埋蔵文化財調査室から借用し、解説文をお願いした。さらに、パネル出力、搬入・搬出、会場設置、その他開催にあたっての諸手続き、広報・渉外は、図書館職員にご尽力いただいた。

この展示は、FBS福岡放送、NHK福岡放送局、西日本新聞社の各メディアで報道された。会場の立地の良さも手伝い、学生、教職員、卒業生、一般市民と、年齢も立場も幅広い多くの方々にご来場いただく結果となり、当初の12月17日までの会期は、好評につき24日まで延長された。特別展示は３章から成り、展示資料の概要は右の通り。

（特別展示担当　中村江里）

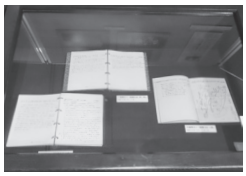
第１章「学徒出陣」と壮行会 －征く者と送る者－

1943（昭和18）年10月の「学生徴収延期」にかかる公文書を始めとして、同月19日開催「出陣学徒全学壮行会」や、11月22日開催「農学部出陣学徒壮行会」に関する資料などを展示。

九大法文会新聞部発行の『九州帝國大學新聞』第269号（1943年10月20日付）には、総長以下、各教官の激励文、学生の所感が掲載されている。

第２章 出陣学徒の言葉 －征きし者たち－

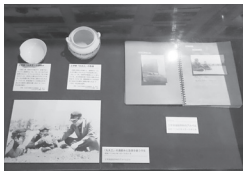
出征した学生の旧蔵資料を展示。日記、アルバム、写真、葉書、弔辞、戦後に執筆された回想録など、多様な資料から出陣学徒の姿と思いを振り返る。



出陣学徒の1人、中楯潔氏の日記帳や、学生時代の『讀書日記』が残されている。

第３章 戦時下の大学と学生生活

報国隊、防護団、女子挺身隊、学徒隊、軍事教練、勤労作業などの戦時下ならではの資料から、教室や食事の一風景まで、当時の大学生活がうかがい知れる写真、書類、物品等を展示。



1944年卒業生アルバムと学生の写真、当時使われていた急須と湯飲みも残っている。

九州大学大学文書館委員会名簿

委員長	理事・副学長		谷口倫一郎
委　員	文書館	教授	藤岡健太郎
〃	〃	准教授	赤司　友徳
〃	比文院	教授	伊藤　幸司
〃	法　院	教授	熊野　直樹
〃	博物館	教授	三島美佐子
〃	韓　セ	教授	永島　広紀
〃	人文院	講師	国分　航士
〃	総務部総務課	課長	遠藤　佑
〃	人文院	准教授	荒木　和憲
〃	ＩＭＩ	准教授	ガイナダニエル
委　員	芸工院	准教授	上田　和夫
〃	薬　院	教授	田中　嘉孝
〃	基幹院	准教授	飯嶋　裕治
〃	先導研	准教授	山下(アルブレヒト) 建
〃	生物環境	教授	吉田　敏
〃	博物館	館長	宮本　一夫
〃	総務部	部長	井上　賢一
〃	理学部等	事務部長	松尾　純
〃	図書館	事務部長	細川　聖二

（2024年１月１日現在）

九州大学大学文書館名簿

館　長	理事・副学長		谷口倫一郎
副館長	文書館	教授	藤岡健太郎
専任教員	〃	准教授	赤司　友徳
兼任教員	比文院	教授	伊藤　幸司
〃	法　院	教授	熊野　直樹
〃	博物館	教授	三島美佐子
〃	韓　セ	教授	永島　広紀
〃	人文院	講師	国分　航士
協力研究員	長崎大学名誉教授		柴多　一雄
〃	九州大学名誉教授		柴田　篤
〃	福岡市博物館総館長		有馬　學
〃	九州大学名誉教授		折田　悦郎
〃	九州大学名誉教授		後小路雅弘
〃	九州大学名誉教授		高野　信治
〃	元西日本新聞社		大西　直人
〃	熊本学園大学商学部講師		市原　猛志
〃	清水建設株式会社技術研究所		松本　隆史

総務課長（法人文書資料室長）	遠藤　佑
事務職員	江藤まゆみ
事務補佐員	中村　江里
〃	大谷　荘平
〃	江頭　実生
〃	浅田　美華
〃	加藤　絢子
〃	金丸　敏昭
〃	有田　陽子
〃	立石　聖一
〃	奥平　恵
テクニカルスタッフ	クウィーラ, ダーヴィト＝ドミニク
専門研究員	ルーヴェン・カトリック大学　博士課程
	ウェルス, ヨリンデ・ハンナ・エル
	静岡県立大学教授　森山　優

（2024年１月１日現在）

大学文書館日誌抄録（2023年１月～2023年12月）

1.5（木）　九州大学名誉教授、資料調査のため来館（18日、２月２日、16日、17日、24日、３月２日、16日、28日、30日、４月６日、14日、20日、27日、５月18日、６月１日、15日、21日、７月４日、20日、26日、８月３日、４日、９月７日、19日、21日、10月５日、10日、19日、24日、11月２日、９日、13日、16日、20日、22日、24日、27日、30日、12月６日、７日、26日も同様)。

1.10（火）　元九大生協職員一行、資料調査のため来館（16日、23日、30日、２月６日、13日、20日、27日、３月６日、13日、20日、27日、４月４日、11日、18日、25日、５月９日、16日、23日、30日、６月６日、13日、20日、27日、７月４日、11日、18日、25日、８月

８日、18日、29日、９月５日、12日、19日、26日、10月３日、10日、17日、24日、31日、11月７日、14日、21日、28日、12月５日、12日、19日、26日も同様)。

1.12（木）　人事部人事給与課より資料閲覧のため来館。

1.20（金）　九州大学卒業生に資料提供。

1.31（火）　人事部人事給与課より資料閲覧のため来館。
飯塚市教育委員会より資料閲覧のため来館。

2.16（木）　人事部人事給与課より資料閲覧のため来館。

2.27（月）　名古屋大学名誉教授、資料閲覧のため来館（６月13日、11月28日も同様)。

3.1（水）　江頭実生事務補佐員就任。
人事部人事給与課に資料提供。

3.22（水）　柴田篤名誉教授来館、資料寄贈。

3.31（金）　クウィーラ，ダーヴィト＝ドミニク、テクニカルスタッフ退任。
『九州大学大学史料叢書』第29輯刊行。
『九州大学大学文書館ニュース』第46号刊行。

4.6（木）　藤岡健太郎教授、九州大学新規採用職員研修にて講義。

4.12（水）　株式会社トスプランニングに資料提供。
「大学とは何かⅠ」(基幹教育総合科目）開講（藤岡健太郎教授・赤司友徳准教授)。

4.13（木）　株式会社エル・アイ・ビーに資料提供。

4.17（月）　ルーヴェン・カトリック大学より学生のインターンシップ受入れ。

4.26（水）　広島大学助教、文書館視察のため来館。

4.28（金）　後藤恒一氏より資料寄贈。

5.8（月）　人事部人事給与課に資料提供。

5.9（火）　医学部等事務部学務課に資料提供。

5.12（金）　医学部同窓会に資料提供。

5.24（水）　医学部等事務部学術協力課より資料閲覧のため来館。

5.25（木）　学務部学生支援課より資料閲覧のため来館。

5.26（金）　理学部等事務部教務課に資料提供。

5.29（月）　株式会社ワン・トゥー・ワンに資料提供。

5.30（火）　学務部基幹教育・共創学部課より資料移管。

5.31（水）　椛嶋佑太事務補佐員退任。

6.5（月）　株式会社大央に資料提供。

6.6（火）　元立命館大学教授、資料閲覧のため来館。

6.19（月）　吉増氏より資料寄贈。

6.20（火）　医学部助教、文書館視察のため来館。

6.29（木）　工学部材料工学部門より資料寄贈。

7.7（金）　NHK福岡放送局より資料調査のため来館（11日も同様)。

7.12（水）　NHK福岡放送局に資料提供。

7.18（火）　小野寺龍太氏より資料寄贈。

7.20（木）　内閣府地方創生推進事務局より資料閲覧のため来館。

7.21（金）　工学部等事務部教務課より資料閲覧のため来館。

7.24（月）　『登録有形文化財記念展示　九州大学と旧工学部本館』開催（於伊都キャンパス　フジイギャラリー、主催：九州大学総合研究博物館、共催：九州大学大学文書館ほか、開催期間：７月24日～11月10日)。

7.31（月）　九州大学病院助教、大学文書館視察のため来館。

8.1（火）　浅田美華事務補佐員就任。
法政大学助手、資料閲覧のため来館。

8.17（木）　施設部施設企画課に資料提供。

8.21（月）　森山英明氏より資料寄贈。

8.25（金）　研究・産学官連携推進部研究企画課より資料閲覧のため来館。
人事部人事給与課より事務文書移管。

8.28（月）　九州大学名誉教授、資料閲覧のため来館。

8.30（水）　施設部施設管理課より事務文書移管。

8.31（木）　財務部資産活用課、農学部等事務部より事務文書移管。

9.1（金）　施設部施設企画課、研究・産学官連携推進部グラントサポート室より事務文書移管。

9.7（木）　九州大学農学部附属農場、附属図書館事務部より事務文書移管。

9.12（火）　別府病院事務部より事務文書移管。
9.13（水）　監査・コンプライアンス室、企画部企画課、人事部人事企画課、企画部社会共創課より事務文書移管。
9.14（木）　船越千尋氏より資料寄贈。
9.20（水）　静岡文化芸術大学特任助手、資料閲覧のため来館。
9.22（金）　病院事務部総務課より資料閲覧のため来館。
9.25（月）　お茶の水女子大学准教授に資料提供。
高橋健二氏より資料寄贈。
9.26（火）　農学部附属演習林より事務文書移管。
9.27（水）　宇都宮大学主任研究員、資料調査のため来館。
9.28（木）　国際部国際企画課、国際部留学課、総務部同窓生基金課、財務部財務企画課、財務部決算課、学務部学務企画課、 学務部基幹教育・ 共創学部課、学務部学生支援課、学務部入試課より事務文書移管。
10.1（日）　ルーヴェン・カトリック大学博士課程ウェルス，ヨリンデ・ハンナ・エル氏、専門研究員就任。
10.3（火）　森山優氏より資料寄贈。
10.5（木）　人文社会科学系事務部、附属図書館事務部、研究・産学官連携推進部、農学部等事務部より事務文書移管。
福岡県公文書等連絡会議開催。
10.10（火）　「文書記録活動論」（ライブラリーサイエンス専攻）開講（赤司准教授）。
10.12（木）　株式会社VSQに資料提供。
10.13（金）　「九州大学の歴史Ⅰ」（基幹教育総合科目）開講（藤岡教授）。
10.17（火）　総務部総務課より資料閲覧のため来館。
10.19（木）　田川市石炭・ 歴史博物館に資料貸出。
総務部総務課、理学部等事務部、工学部等事務部より事務文書移管。
11.7（火）　筑紫地区事務部より事務文書移管。
人事部人事企画課に資料提供。
11.8（水）　西日本新聞社記者、資料閲覧のため来館。
11.15（水）　芸術工学部事務部より事務文書移管。
森山優静岡県立大学教授、専門研究員就任。
11.22（水）　医学部等事務部、病院事務部より事務文書移管。
11.24（金）　早稲田大学教授、資料閲覧のため来館。
11.28（火）　埼玉大学教授、 資料閲覧のため来館。
11.30（木）　FBS福岡放送より取材のため来館（12月6日も同様）。
12.2（土）　附属図書館特別展示「「学徒出陣」から80年目を迎えて」開催（於伊都キャンパス　中央図書館、 主催：九州大学附属図書館、 共催： 九州大学大学文書館・ 九州大学文学部同窓会、開催期間：12月2日～12月24日）。
12.8（金）　「九州大学の歴史Ⅱ」（基幹教育総合科目）開講（赤司准教授）。
12.12（火）　人事部人事給与課に資料提供。
12.13（水）　毎日新聞社に資料提供。
12.15（金）　堤康弘氏より資料寄贈。
12.26（火）　人事部人事給与課に資料提供。

九州大学大学文書館ニュース　第47号
Kyushu University Archives

発行日　2024年3月31日
編集
発行　九州大学大学文書館
〒812-8581 福岡市東区箱崎6－10－1
Tel:092-642-2292
印刷　株式会社ミドリ印刷